

日本医科大学耳鼻咽喉科学教室 百年史

1996

日本医科大学耳鼻咽喉科学教室

序

この書物、「日本医科大学耳鼻咽喉科学教室百年史」は1896年小此木信六郎先生が日本医科大学の遠い前身である済生学舎で耳鼻咽喉科学の講義をはじめて100年を経た歴史を記念して作られたものである。

本書は順天堂大学医学部酒井シズ教授の筆による新稿「日本医科大学耳鼻咽喉科学教室」に加えて、日本医科大学開講70周年に際し同門の横川弘蔵先生が執筆され、雑誌「耳鼻咽喉科」に掲載された「済生学舎と小此木信六郎」および「日本耳鼻咽喉科学会百年史」に含まれている「日本医科大学耳鼻咽喉科学教室史」それに今回新たに教室の八木教授により執筆された「平成5年から現在に至る教室史」からなっている。ご多忙の中を丹念な資料の収集の下にご執筆頂いた酒井教授、転載を快諾された横川先生、医学書院、日本耳鼻咽喉科学会に厚い感謝の念を禁じ得ない。さらに刊行を担当された同門の荒牧元刊行委員長をはじめとする刊行委員はもちろん、百周年の企画、実行のため一致団結して事に当たった日本医科大学耳鼻咽喉科学教室および同門会である橘鏡会一同の努力の結晶であることも強調しておきたい。さらにご存命ではあるがご高齢のためその流麗な文章を頂くことができなかつた大藤敏三名誉教授、ご存命であれば本書の内容がさらに充実したと信じられる橋本泰彦名誉教授その他大勢の方々の叙述を加え得なかつたのは残念である。

本書は日本医科大学開講百周年をことさら誇るために刊行されたものではない。もちろん、教室、同門にとり、先輩の築いてきたこの百年の歴史を反芻し、その伝統を継承し、将来の発展に資する意義は重い。百年というのは一朝一夕のことではないからである。しかし、本書は日本医科大学史に終始しているのではなく、日本耳鼻咽喉科学史そのものになっている。記述は淡々として客観的、科学的で、多数の資料に裏づけされ、感情に走るところがない。単なる古き日本医科大学の回顧ではないことが一読のうちに理解されよう。本書により日本医科大学および日本の耳鼻咽喉科学がその歴史のなかで生成、展開していった過程が後の世に伝えられることを願っている。

顕示欲に溺れず、みせかけの術に墮することなく、堅実な学問の確立、進展を旨とした、また今後目ざそうとしている日本医科大学の姿勢を本書から読みとって頂ければ幸いである。

1996年9月29日

日本医科大学耳鼻咽喉科学教室開講百周年記念事業実行委員会

委員長 奥田 稔

副委員長 八木 聰 明

刊行委員長 荒牧 元

目 次

序	i
日本医科大学耳鼻咽喉科学教室	酒 井 シ ズ 1
済生学舎と小此木信六郎	横 川 弘 蔵 15
日本医科大学耳鼻咽喉科学教室史 —日本耳鼻咽喉科史より—	57
日本医科大学耳鼻咽喉科学教室史 —日本耳鼻咽喉科学会百年史より—	61
日本医科大学耳鼻咽喉科学教室史 —平成5年から現在—	63

日本医科大学耳鼻咽喉科学教室

酒 井 シ ズ

(順天堂大学医学部医史学教授)

はじめに

日本医科大学の歴史は、明治9年(1876)に長谷川泰が済生学舎を開設したときに始まる。済生学舎での耳鼻咽喉科学の講義は明治29年(1896)10月25日に小此木信六郎によって始まった。従って、本学の耳鼻咽喉科学教室はこのときをもって開講の日とし、小此木信六郎を初代としている。ところで済生学舎の名前も遠くなり、知る人も少なくなったので、まず済生学舎の歴史について記す。

済生学舎と医術開業試験

済生学舎は医術開業試験を受験する道を選んだ者のために設立された医学校である。医術開業試験とは、明治新政府が漢方から西洋医学に一新するために明治8年(1875)に布告した医制の中で定めた開業するための資格試験であった。受験資格は医学校卒業か、2年以上にわたって専門医の指導を受け、修業した証明書があることであった。済生学舎には全国各地から受験志望者が集まり、常時、1000名前後の生徒が学んだマンモス医学校であった。ここに学んだ全員が医術開業試験に合格したわけでない。しかし、明治20年代の新たに開業免許を得たものの過半数が済生学舎出身であったこともあった。

明治28年(1895)の日清戦争勝利のあと、高学歴志向の傾向が現れたが、大学は東京に一つあるだけで、受験難の時代が到来した。政府は明治30年に京都大学を創立し、同時にそれまで放置してきた高等教育の整備を始めた。医学教育に関しては、私立医学校を明治36年(1903)に勅令をもって公布した専門学校令の対象とし、専門学校に昇格できなければ廃校にする方針を出した。つまり、届け出だけで設立が認可されていた私立の医学校が文部省所定の条件を満たした専門学校にならなければ存続を認めない方針を出したのである。また、この頃、大学卒業の医師の間から自分たちと医術開業試験の合格者が同じ医師であることに対する懸念の聲が高まり、医術開業試験制度の廃止を強く求めていた。医師免許を取得するには、医学専門学校を卒業し、国家が行なう医師試験に合格する改正案が出ていたのである。これと前後して、医師法の制定と全国規模の医師会設立を求める声が強くなってきていた。そこで医師法案では新しい医師資格制度を盛り込み、医術開業試験の廃止期限を医師法案が草案されたときから10年後の明治47年(1914)に定めたのである。しかし、医師法案を決定するまで紆余曲折があり、明治39年(1906)になってようやく医師法案が議会上程、可決された。しかし、医術開業試験廃止の時期を1914年(大正3)とすることには変わらなかった。

この法律が施行されると、済生学舎を卒業しても医師試験の受験資格は得られない。それより先に専門学校令による専門学校昇格が求められていた。しかし、長谷川泰は済生学舎の実績を理由に、大学昇格であればともかく、専門学校しか認可しないというのは本意である。従って廃

校するしかない、明治36年(1903)8月31日、唐突に誰に諮ることもなく、一片の広告を出しただけで在校生700名余(一説には1000名余)がいる済生学舎を閉校にしてしまった。なお、当時、大学は官立だけであり、私立大学の設立が認められるようになるのは大正7年(1918)に勅令をもって大学令が公布されてからである。

小此木信六郎と済生学舎、日本医科大学

ところで、済生学舎で耳鼻咽喉科学の講義を始めた小此木信六郎(1860-1928)は、ドイツのチュービンゲン大学出身の新進気鋭の若手医師であった。小此木は福島県二本松町の藩医小此木閑雅を父に生まれ、はじめ福島県須賀川の医学校に入ったが、明治9年(1876)、東京医学校の予備門(旧制第一高等学校の前身)に入学、ついで東京大学医学部に進学した。しかし、明治21年(1888)7月に大学を退学してドイツに渡り、チュービンゲン大学に入学。明治24年(1891)に同大学医学部を卒業した。さらに1894年までの3年間、耳鼻咽喉科学をWagenhäuser教授に学び、卒業論文「Über Labyrinthkrankung und deren Symptomenkomplex bei hereditärer Spätsyphilis」を提出してドクトルメジチーネを取得した。その後もWagenhäuserの有給助手となって研鑽を積み、明治29年(1896)6月に帰国。8月には東京神田区南甲賀町10番地に小此木耳科医院を開業した。自宅で耳科学の講習会を開き、ドイツの耳鼻咽喉科学を紹介したが、後述する東京耳鼻咽喉会に入会して、同会の副会頭となり、同年7月の例会で「晩発性梅毒に因する内耳炎について」という題で講演を行なっている。さらに翌30年(1897)に第1回大日本耳鼻咽喉科学総会が開催されたときは、耳鼻咽喉科学の専門家として重要な役割を果たしている。

ところで済生学舎の講義が本格的に始まったのは29年の10月からであった。この時の小此木信六郎の講義がいかに得難いものであったかを、済生学舎の校長長谷川泰は第21回外科実地演習、第22回顕微鏡実地演習会の修了式の祝辞の中で次のように述べている。

「耳鼻咽喉科の演習を為すは日本唯一の大学(東京大学)にもなし、只た僅かに東京の某病院に一個所あるのみにして、到底全国中何処へ行くとも之を為すこと能はざる所にして、而も小此木先生は斯学に在りては彼国に於いてすでに有名なる先生にして其の業績の如き彼国の雑誌中に記載せられるもの多く、なかなか他の専門家と称する人々の及ばざる所なれば、この如き先生についてこの如き新専門学の演習を受けたる諸君は実に絶大の利益を得たる人というを憚らざるなり云々」と。某病院とは高木兼寛の病院であろう。済生学舎は校舎や設備では、高木兼寛の医学校に劣ったが、講師は小此木のような外国帰りの医師や東京帝国大学医科大学の助手クラスが担当していることを誇りにしていた。明治末から大正にかけての東大教授の中には済生学舎で講義した人が何人もいた。このときの小此木は『済生学舎雑誌臨床講義録』に収載されて明治33年(1900)に刊行された。続いて明治35年からは、済生学舎で行った臨床講義を『済生学舎医事新報』に「耳鼻咽喉科実地演習講義」と題して連載した。

小此木は済生学舎が廃校になった後も、ずっと本学にとって重要な役目を果たしてきた。とく

に日本医学専門学校が文部省の指定を受けるのに難渋して学生騒動が起きたときに、理事長となり、中原徳太郎、塩田広重らとはかって騒動を無事切り抜けたのである。また、専門学校から日本医科大学に昇格するときにも理事長として尽力した。しかし、昭和2年(1927)11月17日に中原徳太郎学長が腫瘍で亡くなったあと、小此木は学長を引き受けたが、激職にあつて宿病の心筋梗塞が悪化して、昭和3年1月6日、学長になってわずか2ヶ月足らずで亡くなった。

日本の耳鼻咽喉科学の黎明期に活躍した人々

小此木信六郎が帰朝した頃の耳鼻咽喉科学は黎明期にあつた。耳鼻咽喉科の専門医は数えるほどしかいなかった。最初の専門医は賀古鶴所(1855-1931)と金杉英五郎であつた。二人は小此木と同じ明治21年(1888)12月にドイツに行き、軍医であつた賀古は9ヶ月間のドイツ滞在中に耳鼻咽喉科学を研修して、翌22年10月に帰国。軍医学校で耳鼻科学の講義を始めた。このとき同時に飯田橋にあつた博愛社病院(後の日本赤十字社病院)で耳科の診療科を設けて診療を始めた。耳鼻科の日本最初の診療科である。耳鼻科学のパイオニア賀古は、明治24年(1891)に開催された日本医学会で「耳病の説」と題して講演を行った。耳鼻科の学術講演の最初のものであつた。しかし、現代では賀古は耳科学のパイオニアより森鷗外の東大時代のクラスメートで、生涯の盟友で、最後に遺言を託された人としてのほうが広く知られている。

賀古と一緒に船で渡独した金杉英五郎は、明治21年(1888)に東京大学医学部の別課を卒業したあと、直ちに内科を研修する目的で留学したのであつたが、エルラゲン大学で急遽、耳鼻咽喉学を専攻することにした。同じ頃ドイツに留学中で、小児科を専攻していた瀬川昌者は、日本に宛てた手紙の中で、耳科は小児科にも必要であるが、日本では耳科を専修する人はまだいないように思われるから、自分はルーツェ氏などについて耳科を研究していると述べ、東大の外科のお雇い教師シュルツェは耳科は各科の中で一番遅れているといっていたが、ドイツに来てみると、話は違って、ずいぶん進歩していたとも述べている。おそらく金杉もそれに気づいて耳鼻咽喉科を専攻することに決めたのであろう。金杉は4年間の留学中にドクトルメジチーネを取得して、明治25年(1892)3月に帰国。同年9月、金杉は高木兼寛の東京病院に新たに開設された耳鼻咽喉科で診療に当たり、東京慈恵会医科大学の前身である東京慈恵医院医学校で講義を始めた。日本で2番目の耳鼻咽喉科学の講義である。明治26年(1893)になると金杉は賀古や門下生らとはかり、東京耳鼻咽喉科会を創立し、11月には耳鼻咽喉科雑誌を創刊した。会頭は金杉英五郎であつた。この頃になると耳鼻咽喉科も世間に知られ、患者が増えてきたので、金杉は明治28年(1895)の暮、日本橋久松町に東京耳鼻咽喉科医院を開院し、ここでも診療だけでなく、教育にも当り、耳鼻咽喉科学の啓蒙に努めたのである。なお、耳鼻咽喉科の名称は金杉が造語したものである。

関西では、明治22年4月に第三高等中学校医学部(岡山大学医学部の前身)に在学中の堀内謙吉がドイツに留学して、耳鼻咽喉学を学んでいる。明治28年に帰国した堀内は大阪の緒方病院に開設された耳鼻咽喉科を担当して、関西方面の耳鼻咽喉科学の先達となつたのである。

東大では明治 28 年に耳鼻咽喉科学講座の開設を決定し、翌 29 年、小此木が帰国した年に岡田和一郎がドイツに派遣された。岡田はそのとき外科のお雇い教師スクリバの助教授であった。岡田はドイツ各地の大学で 5 年間にわたって耳鼻咽喉学を研修し、明治 32 年 (1899) に帰国。直ちに日本最初の耳鼻咽喉科学講座の担当助教授となった。初期の頃の耳鼻咽喉科学の学者の中で、日本医大と関係のある久保猪之吉の名前は落とせない。久保は大藤敏三の恩師で、日本医大に大藤を推薦した人であるからである。久保は明治 33 年 (1900) に東大を卒業し、翌 34 年 1 月から岡田和一郎の最初の助手となった。明治 36 年 (1903)、新たに発足した京都帝国大学福岡医科大学 (現在の九州大学) が開学するにあたり、耳鼻咽喉科教授に就任することが内定して、4 年間、耳鼻咽喉科学研修を目的に海外留学した。ドイツ、ウィーンでの研修を終えて、明治 40 年 (1907) に帰国、東大、京大に続いて九大の耳鼻咽喉科学講座が開講した。久保の活動範囲は教育、研究、診療だけでなく、学会運営など広い。

在校生救済のための医学講習会

済生学舎の廃校は在校生にとって文字どおり晴天の霹靂の出来事であった。在校生は広告に驚き、動揺した。取りあえず善後策を考えようと、9 月 4 日に本郷中央会堂に緊急に集まり、相談した。そこで決まったのは、医術開業試験受験の初志を貫徹するために済生学舎同窓会が神田三崎町一丁目の大成学館跡に医学講習会を設けて、済生学舎時代の教員を核に講習を行なうことであった。同窓会医学講習会の会則によると、同会の入会資格は旧済生学舎生徒にして明治 36 年 7 月以降に同学舎に在学した者で、年齢 18 歳以上、品行方正なる男子にして、高等小学校卒業または同等の学力の在るものとしている。なぜなら済生学舎の男女風紀の乱れが指摘されていたことに生徒達は義憤を感じていたからである。このときの講習会設立はあくまでも在校生の救済を目的としたものであった。

その後、もう少し対象範囲を広げた講習会が発足している。東大の外科助手で、済生学舎で講師であった丸山文良の医学温習会、済生学舎講師の石川清忠による同窓医学講習会、日本医事週報主幹の川上元治郎による医事研究会が発足したのである。しかし、医学温習会は丸茂文良が 3 年後に亡くなったことで終わった。

医学校の設立

明治 37 年 (1904)、日露戦争勃発の年、たくさんの軍医を必要とする政府は、医学教育に限って専門学校令の規定の施行を延期して、専門学校でなくても医学校を認める方針を出した。同窓医学講習会は、旧済生学舎の講師を動員して本郷千駄木町に医学校を設立し、名を私立東京医学校と改めた。講師の中に後に本学にとって重要な役割を果たす中原徳太郎がいた。生徒も済生学舎の在校生に広く呼びかけて、東京女子医学校から女子生徒が転校するなど一時は盛況に見えた。

しかし、明治43年(1910)に将来の見通しが立たないまま、後述の私立日本医学校に併合され、現在の日本医科大学へと続いたのである。

医事研究会は済生学舎の生徒の窮状に義憤を感じた医学ジャーナリスト川上元治郎が創ったものであったが、医師磯辺検蔵は川上の指示を受けて、同郷の政治家で医師山根正次とはかつて私立日本医学校を創立した。校長に山根が就任し、磯辺が学監となって、明治37年4月15日に神田美土代町の東京医師倶楽部で後期学科の授業を開講。現在その日を日本医科大学の創立記念日としている。また同年4月24日から三崎町の大成学館跡で前期学科の講義を始めた。生徒数は予想を超えて増えたことや、2個所に別れていることの不便から校舎を神田淡路町万世倶楽部に移し、順調な発展を遂げていった。

一方、千駄木町の私立東京医学校が廃校を決定したことで、日本医学校が東京医学校を在校生を含めて校舎もろともに吸収合併することになった。校舎は千駄木町の東京医学校跡を使い、淡路町校舎を病院に改造した。最初の附属病院である。日本病院と呼んだ。

耳鼻咽喉科学の講義

済生学舎の廃校後、耳鼻咽喉科学の講義は一時途絶えたが、生徒は東京医師倶楽部で明治35年(1902)1月から金杉英五郎や岡田和一郎らが行っていた医学講習会に出席した。37年4月に淡路町の私立日本医学校が開講してから、正課課外講義に金杉英五郎と岡田和一郎による講義が行われたが、明治39年(1906)6月からは小此木信六郎が日本医学校の講師となり、その講義を引き継いだ。なお、東京医師倶楽部での金杉、岡田の講義は明治42年(1909)12月まで続いた。

医学専門学校への昇格

日露戦争が終わり、専門学校令の特例が認められなくなったために、日本医学校は医学専門学校に昇格の準備を始めた。しかし、それには高いハードルがあった。そのひとつが附属病院の拡充である。それには本郷区区議員で医師滝沢竹太郎が好意をもって、所有する根津真泉病院を提供されたことで解決したが、資金面に大きな問題を抱えていた。その問題も磯辺検蔵が私財を提供して、一応解決し、明治45年7月10日に財団法人日本医学専門学校が認可され、同年9月から開校した。しかし、文部省指定校になるには設備、教員は整っていなかった。文部省指定とは私立医学専門学校が文部省が定めた水準に達したとき、文部省が指定と認定し、卒業生は国の行なう医師試験を受験することなく医師免許を得ることが出来る制度であった。指定の有無は学生にとって重大な関心事であった。医学専門学校になって入学した学生は卒業時には指定校になっているという約束であった。約束不履行を学校当局に追及し、学生が総退学するといういわゆる「学校騒動」が起こった。大半の学生が退学し、彼ら自らが結集して、現在の東京医科大学を創ったのである。一方、残った生徒はこの非常状態の間も授業を休むことなく続け、大正5年(1916)

に日本医学専門学校の第1回卒業生として卒業した。廃校になることを免れた医学専門学校を支援したのが小此木と東京医学校の講師で、代議士であった中原徳太郎であった。大正7年4月、磯辺を始めとする理事がすべて経営責任をとって退任して、新体制を整えたが、このとき理事長になったのが小此木で、校長に中原徳太郎がなり、教務顧問に東大の外科の助教授であった塩田広重になった。塩田は済生学舎時代に外科学の講義を担当し、廃校後も講習会の講師を務めていたのである。学監には法律顧問の近藤達児が就任して、それからの日本医学専門学校は政治力のある中原、教授陣の補充に力を発揮した塩田が組んだことで、見違えるような発展を遂げた。大正8年8月に待望の文部省指定を受け、大正15年12月に日本医科大学に昇格して、翌年開校したのであった。

この間に関東大震災で校舎をはじめ病院も甚大な被害を蒙ったが、経済的には各界の実力者の支援を受け、医学の面では東大の協力をえて、卒業生も一体になって大学昇格運動を盛り上げ、支援した結果、大正15年(1926)に私立医科大学としては、慈恵、慶應について3番目に財団法人日本医科大学が認可された。その後、太平洋戦争の末期に軍医の大量短期養成が求められた時、臨時医学専門部を予科のキャンパスに併設した。専門部の部長は塩田広重学長が兼任し、主任には耳鼻咽喉科教授高木小三郎が兼務した。専門部は1回生と2回生が入学した後、終戦となったために3回生の募集は行われず、2回生が卒業した昭和25年(1950)をもって廃止された。また、学制改革により、昭和26年(1951)から新制日本医科大学となった。昭和35年(1970)には大学院が設置され、戦後の混乱期を無事に切り抜け、順調な発展を遂げたのである。

附属病院

日本医学校が千駄木に移転したあと、淡路町校舎を附属病院にしたが、医学校から専門学校に昇格するために必要な財団法人の認可を受けるのには不十分であった。そのとき本郷区議員滝沢竹太郎から根津に経営する真泉病院を附属病院として提供を受け、磯辺検蔵が資産を提供して財団法人日本医学専門学校が認可された。二番目の附属病院である。しかし、この病院は大正3年(1914)文部省の指定問題で学内が不穏な状態にあったとき、滝沢に返還された。その代わりに急遽、新たに根津権現の裏に建設した。それが後に附属病院とよばれる病院のはじまりである。当時は本郷附属医院と呼ばれていた。

大正12年(1923)、飯田橋の国学院が所有していた土地、建物を譲り受け、内部を改装して、附属病院を7月に開院することにした。附属飯田町医院である。ところが9月1日の関東大震災ですべて灰塵に帰した。その場所に病院が再建されるのは昭和6年(1931)であったが、このとき建てた病院は鉄筋コンクリート地下1階地上6階の堂々とした建物であった。このときからここを第一医院と呼び、従来の本郷附属医院は第二医院と呼ぶことになった。第二医院は昭和11年(1936)に増改築を行い、同年7月に鉄筋コンクリート地下1階地上3階建ての病院が竣工して、装いを新たに開院した。翌12年(1937)に新丸子に丸子病院が開院した。ここは本学の維持

員であった五島慶太氏が、昭和元年に日本医科大学に昇格した時、約1万坪の土地を無償で提供されて、予科校舎が建ったところであった。病院は地下1階地上2階建ての鉄筋コンクリートの瀟洒な建物であった。のちにここを第三医院と呼んでいたが、昭和51年(1976)、千駄木の病院を附属病院、飯田橋を第一病院、新丸子を第二病院と呼称を変更した。その翌52年(1977)に多摩永山病院が開院されて4附属病院となったが、さらに平成5年(1993)に千葉県印旛郡印旛村に千葉北総病院を開院したことにより、現在は5つの附属病院を擁している。

歴代の教授

(カッコ内は在任期間)

小此木信六郎 (1904-1928)

小此木は済生学舎で耳鼻咽喉科学を最初に講義した人であり、明治45年(1912)9月に私立日本医学校が日本医学専門学校に昇格する前後も耳鼻科咽喉科学の講義を担当した教室の初代教師であるが、同時に本学の理事、理事長、学長を勤めたことにより、在任期間はその期間も含んでいる。小此木についてはすでに別項で述べたので、ここでは省略する。

桑名龍太郎 (1914-1930)

小此木の次に講師となったのが桑名龍太郎であった。桑名は明治43年(1910)に東大医学部を卒業し、岡田和一郎の耳鼻咽喉科学教室に入局している。桑名は講義だけを昭和5年まで担当したが、診療、研究は行わなかった。

宇田 清 (1918-1926)

大正8年(1919)文部省の指定を受けるために教授陣の強化が行われたが、このとき教授に就任したのが宇田清であった。宇田は講義と本郷附属医院(現在の附属病院の前身)での診療を担当した。つまり、診療科としての耳鼻咽喉科は宇田から始まったのである。

西崎豊寛 (1922-1924)

この頃、宇田と平行して西崎豊寛が教授であった。西崎は大正7年(1918)に東大医学部を卒業し、岡田門下に入り、大正11年(1922)に本学の教授となった。しかし、在任期間は短く、大正13年(1924)、関東大震災の翌年に辞めている。

深浦文雄 (1924-1928)

西崎の後に着任したのが深浦文雄であった。深浦は明治44年に東大を出て、岡田門下に入り、大正13年に着任したが、このとき本学はちょうど専門学校から大学への昇格運動を盛んに行っていたときであった。深浦は昇格が実現して、一段落した昭和3年(1928)に辞めている。

杉浦右門 (1926-1930)

大正15年(1926)、大学昇格が認可された年に杉浦右門が宇田の後任として教授に就任した。杉浦は大正10年(1921)に東大を卒業した岡田門下生である。杉浦の時代も講義と本郷附属医院で診療が行われたが、教室の研究体制はまだ出来ていなかった。

西端驥一 (1930-1933)

教室での研究が始まるのは、昭和5年(1930)に杉浦の後任に西端驥一が就任したときからであった。西端は大正9年(1920)に東大を卒業。杉浦より1年先輩であった。西端が就任した翌6年、待望の第一医院が飯田橋に竣工し、開院したことから、診療は千駄木と飯田橋の第一医院で行われたが、病院の設備は第一医院がはるかに整っていた。西端の時代に診療と講義に加えて研究が本格的に始まった。テーマは主として前庭迷路に関する研究と鼻副鼻腔に関するものであった。しかし、西端も在任期間が短く、昭和8年(1933)、わずか3年の在任で退任、開業した。しかしその後慶応大学教授に就任している。

義江義雄 (1933-1937)

西端に代って昭和8年(1933)に教授に就任したのが義江義雄であった。義江は大正15年(1926)に東大を卒業して、岡田耳鼻咽喉科に入局して7年目に本学に就任した。この頃日本医大は第一医院に続いて、千駄木の附属病院の大改築が始まっていた。

義江教授時代の研究のメインテーマは中耳の病理とX線学的研究であった。しかし、昭和12年(1937)に義江は多摩全生園に転任、ハンセン病患者の治療に精力的に活躍し、後に国立多摩研究所の所長となって、斯界のリーダーとなった。

大藤敏三 (1937-1968)

このように耳鼻咽喉科学教室は大学の教室として名実ともに整ってきたが、それまでに迎えた教授はすべて在任期間が短かった。昭和12年(1937)に着任した大藤敏三教授の時にそれが変わった。大藤教授は昭和43年(1968)に定年退職するまでの31年間在任し、本学の耳鼻咽喉科学教室の基礎を固め、研究にも流れを造ったのである。

大藤は明治34年2月8日に東京に生まれ、第一高等学校に学んだが、卒後、九州帝大に進み、大正15年(1926)に卒業後、久保猪之吉教授の門に入った。九大で講師になった後、旅順の関東庁病院の耳鼻咽喉科医長として旧満州に赴任し、同地で活躍していた。そのとき久保から日本医大の教授に推薦され、昭和12年に着任した。その頃の久保猪之吉は九州大学を定年退官したあと聖路加病院の耳鼻咽喉科部長を勤めていたが、東大で1年先輩で、本学の学長であった塩田広重から耳鼻咽喉科学の教授推薦を頼まれ、大藤を推薦したのであった。

大藤教授の研究のテーマははじめ音声言語学的な研究と慢性副鼻腔炎の治療法であったが、難聴の病態生理学、頭頸部の腫瘍の手術的療法と広がり、大藤門下からたくさんの門下生が育ち、業績が上昇した。

大藤は本学の耳鼻咽喉科学教室を発展に導いただけでなく、国内では日本耳鼻咽喉科学会の宿題報告を行い、同学会の会長を務め、退任後の昭和43年(1968)から同49年(1974)までの間、同学会の理事長となり、昭和44年(1969)には第9回国際耳鼻咽喉科学会の日本代表をつとめ、また、国際耳鼻咽喉科学振興会の発起人、理事となり、欧文専門紙 *Auris Nasus Larynx* の編集主幹などを歴任して、国の内外に広く活躍して、日本の耳鼻咽喉科学の発展に尽くしたのであった。

昭和 43 年に定年を迎えたが、最後の 10 年間は主として第一病院を本拠に活躍した。耳鼻咽喉科学教室最初の名誉教授である。

高木小三郎 (1938-1944)

大藤が教授になった翌 13 年に高木小三郎が教授として着任した。高木は大正元年 (1912) に東大を卒業した岡田門下生であった。しかし、昭和 19 年 (1944) に臨時医学専門部が新丸子のキャンパスに出来たとき、高木はその主任となったのであった。

橋本泰彦 (1961-1978)

大藤の後任には同門で、助教授であった橋本泰彦が昇任した。橋本は明治 43 年 (1910) 生まれで、昭和 10 年 (1935) に本学を卒業して、義江教授の耳鼻咽喉科学教室に入局。昭和 21 年に取得した学位の主論文は「深部副鼻洞の X 線学的研究」であった。昭和 25 年 (1950) に助教授となり、第二病院を担当していたが、昭和 36 年 (1961) に芳野清夫助教授が退任したことにより、附属病院に配置転換され、さらに昭和 36 年に大藤教授が退任したあと、後任の教授となって、第一病院の部長を兼任し、本学出身者で最初の耳鼻咽喉科学の教授となった。橋本ははじめ第一病院に永井汎助教授、附属病院に古内一郎助教授、第二病院に野本耕一郎助教授、弓削庫太助教授をそれぞれ配し、各病院の臨床責任者を明確にし、ついで主任教授と臨床教授の制度を発足させ、第一病院は永井汎、第二病院は弓削庫太を教授に昇任させ、昭和 52 年 (1977) に開院した多摩永山病院には牛嶋申太郎助教授を主任として赴任させて、各病院間の有機的な結合を図ったのである。

橋本教授の主たる研究テーマは鼻、副鼻腔の肉眼並びに X 線解剖学、聴力改善手術の臨床的ならびに実験的研究、気管食道の内視鏡的観察と病態生理学的研究、内視鏡映画による動態観察、癌の治療ならびに基礎的研究、アレルギー性病態に関する研究であった。橋本は昭和 54 年定年退任して、名誉教授となった。

永井 汎 (1971-1979)

永井は昭和 14 年 (1939) に本学を卒業して、大藤耳鼻咽喉科教室に入局。助教授になって第一病院に勤務し、昭和 46 年 (1971) に第一病院担当の教授に就任したが、橋本教授が退任後、次期主任教授の奥田が着任するまでの間、主任代理をつとめ、奥田教授赴任後は附属第一病院院長専任となって、昭和 54 年 (1979) に退任した。

奥田 稔 (1979-1992)

奥田は昭和 26 年 (1951) 千葉医科大学を卒業し、橋本の後任の主任教授として、日本医科大学客員教授兼任を経て和歌山医大から就任した。奥田は気道アレルギーを年来のテーマとしてきたが、日本医大に就任後は気道アレルギーを含めた鼻疾患、頭頸部腫瘍、唾液腺疾患の研究を主体に教育、診療、研究に力を注いだ。教室全体としては、神尾助教授、八木講師が聴力改善手術、神経耳科学、補聴器など耳科学、大塚博邦講師が鼻アレルギー、内視鏡など気道学を分担し、教室の研究分野を広げた。

診療においては新たにアレルギー、めまい、頭頸部癌、唾液腺疾患を対象とした特殊外来が始

まった。

奥田は日本医科大学在任中に日本頭頸部腫瘍学会（1981）、日本臨床電子顕微鏡学会（1987）、日本アレルギー学会（1988）の会長および理事、日本耳鼻咽喉科学会理事、副理事長（1982-83）を多年務め、日本耳鼻咽喉科学会専門医制度の設立に貢献した。また日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会の創設、会長、理事長、日本鼻科学会理事長を多年務め、国際鼻科学会の理事、雑誌 Rhinology, Am. J. Rhinology の編集者、国際鼻科学会（1991）の事務局長、など国内外の鼻科学の発展に大きく寄与した。そのために第4回 International Academic Conference on Immunobiology in Otolaryngology, Rhinology and Laryngology（1994）、第8回 International Congress of Rhinology（1996）で Guest of Honor として表彰された。また日本アレルギー学会理事、同会誌アレルギー編集長、国際アレルギー臨床免疫学会日本代表、（財）日本アレルギー協会理事長、アメリカアレルギー臨床免疫学会鼻炎委員会委員、IFOS アレルギー鼻炎委員会委員長、厚生省アレルギー総合事業研究花粉症研究班班長などを多年にわたり務め、アレルギー学の進歩の一翼を担った。そのほか唾液腺、頭頸部癌、心身医学関係の学会の役員を多年務めた。1988年から1992年まで日本医科大学国際交流センター長を務め、平成4年（1992）3月に退職、教室にとって3人目の名誉教授となった。

弓削庫太（1982-1991）

弓削は昭和24年に本学の専門部を卒業し、大藤教室に入局した。附属病院担当の助教授を経て、奥田の着任後の昭和57年（1982）第一病院担当の助教授となり、永井教授が第一病院院長専任になってから、第一病院の臨床教授として、気管の形態学の研究、中耳炎の手術療法の改善につとめた。

八木聰明（1992-現在）

八木は平成4年（1992）、奥田の後任の3代目の主任教授として助教授から昇任した。八木は昭和44年（1969）に本学を卒業し、生理学を専攻したのち帝京大学医学部耳鼻咽喉科の鈴木淳一教授の教室に入局、その後奥田教授のもとでははじめ講師として神経耳科学の研究と聴力改善手術の研究を進めた。

八木教授が主任教授に就任した翌平成5年、千葉北総病院が開院した。また、平成8年（1996）には耳鼻咽喉科学教室100年を迎えたことで、まさに伝統を受け継ぎ、将来の発展に向けて新しい一歩を踏み出すときに巡り合せたといえる。

教室の主な研究のテーマは、年来のテーマである耳科学の領域の平衡神経学の生理学的研究や眼球運動の三次元解析の他に、内耳免疫の分野ではメニエール病のモデル動物の作成とそれを使った内耳自己抗体による難聴の研究、アレルギーの分野では好酸球の特異機能や肥満細胞の研究、気道の超微形態に関する研究などが行われている。

臨床では特殊外来として「めまい」「アレルギー」「顔面神経」「耳鳴」「補聴器」「腫瘍」の各外来が行なわれている。

現在の医局員数は約70名である。

服部康夫 (1992-現在)

服部は昭和 40 年に本学を卒業し、第二病院担当の助教授から第一病院の診療教授に昇任。第二病院では服部を中心に聴覚器官の電子顕微鏡的研究が行われていた。

歴代の助教授

(教授昇任者を除く)

村上正徳(1931-1932) 公立福島病院耳鼻咽喉科部長として転出、その後、福島県立医科大学教授となった。

芳野清夫 (1948-1961) 昭和 19 年に創立された附属臨時医学専門部の教授を兼任。臨時医専部が廃止した後は主として附属病院を担当していたが、昭和 36 年 (1961) に退職。

野本耕一郎 (1953-1968) 第二病院担当、没後、教授に昇任

古内一郎 (1967-1979) 附属病院担当、独協医科大学教授に就任

牛嶋申太郎 (1977-1979) 多摩永山病院担当

神尾友和 (1978-1985) 現客員教授待遇

島田早苗 (1979-現在) 多摩永山病院担当

大塚博邦 (1989-現在) 第二病院担当

富山俊一 (1990-現在) 附属病院担当

馬場俊吉 (1990-現在) 附属病院担当

青木秀治 (1993-現在) 千葉北総病院担当

同門会橘鏡会

大藤教授が就任して 15 年経った昭和 28 年(1953)、同門会橘鏡会が発足。以来、歴代会長を大藤、橋本、永井がつとめ、現在は奥田(代表幹事)がその任にあたっている。会員数は昭和 58 年の時点では 260 名余であったが、現在数は 300 名となり、隆盛を誇っている。なお、会員は専門医としてだけでなく、医師会をはじめ地域医療で主要なポストで活躍している人が多い。また、同門会は耳鼻咽喉科学の研究を行い、その進歩に寄与し、併せて会員同士の親睦をはかっている。

参考文献

日本耳鼻咽喉科学全書 第 1 巻の 1, 昭和 8 年

便覧日本医科大学 1968 年

日本医科大学八十周年記念誌 昭和 58 年

東京大学医学部百年史 昭和 43 年

横川弘蔵「済生学舎と小此木信六郎」耳鼻咽喉科 第 49 巻 昭和 52 年